

平成31年(令和元年)度自己評価シート(中間評価)

校番	10	学校名	広島県立尾道北高等学校	校長氏名	松井 太	全日制	本校
----	----	-----	-------------	------	------	-----	----

学校経営目標						
達成目標	本年度行動計画	評価	理由	後期に向けての具体的な改善方策	担当部等	
1 課題発見・課題解決学習を推進し、主体的学びを深める。						
1-1 生徒自身が主体的に学び、問い、振り返ることができている。	<ul style="list-style-type: none"> ○生徒の主体的な学び、深い学びを育成する授業を実践する。 ○「問う力」を育成し、授業評価で検証する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・調査問題における思考力問題はすべての科目で定着した。 ・生徒に問いを立てさせる授業について、研究と実践を進めている。その結果、7月実施の授業評価アンケートでは、「問う力」の項目「授業や課題に取り組む中で、自分自身の「疑問」や「問い」を見いだすことができた。」の得点率は76.1%で、目標の80%を下回った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・定期考査における思考力問題の質の向上を、各教科会等を利用して行う。 ・11月の公開研究授業、互見授業に向け、教科で研究・実践を進める。 	教務部 教育研究部	
1-2 産業社会と人間及び総合的な学習(探究)の時間を通じて、課題解決や探究する態度を育てる。	<ul style="list-style-type: none"> ○カリキュラムマネジメント委員会を月2回開催し、目標とする資質・能力の育成について評価し、機能的なカリキュラムの運用について検討する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・教育課程全体についての見直しを行うために、カリキュラム・マネジメント委員会を設け、総合的な学習(探究)の時間、産業社会と人間、授業改善の指針などの検討を進め、「めざす尾道北高の学び」を策定し、各行事でのアンケートなどに活用するなど、実働している。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新規の修学旅行を含めた新カリキュラムの実施及びその評価を進めるとともに、「めざす尾道北高の学び」の推進に向けた職員研修の実施を計画的に進める。 	カリマネ委員会 教育研究部	
	<ul style="list-style-type: none"> ○思考力育成をめざし、外部試験GPS-Academicの受験(1・2学年)を実施するとともに、その職員研修を企画する。 	後期			カリマネ委員会 各教科	
1-3 ICTを活用し、深い学びにつながる授業を実施している。	<ul style="list-style-type: none"> ○ICT環境の整備を進め、効果的な活用による授業改善や業務改善を進める。 ・すべての教職員がICTを活用した授業を実践する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ICTを活用した授業実践は、定着したといえる。 ・1学年では、生徒の学習支援及び教員の業務改善をめざして、Classiを導入した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の深い学びにつながるICT活用に関する指導事例の収集を行う。 ・Classiの活用を進める。 	教務部 総務部 ICT活用推進委員会	

2 教科指導力の向上を図り、生徒の学力を最大限に伸ばす。

2-1 生徒が学習意欲を高め、確かな学力を身に付けている。	○教科指導力を向上させる。 ・進研模試(7・1月)を指標とし、習熟度に応じた指導を行い、PDCAサイクルを機能させ、目標管理によって指導の改善を図る。 ・模擬試験結果分析を行い、その分析内容を授業、定期考査問題の作成等につなげる。(年3回)	C	<ul style="list-style-type: none"> ・模擬試験・スタディーサポートの分析を各教科で実施し、学年全体で課題と解決策を共有した。 ・1年7月進研模試の平均点偏差値は56.5であった。(1年1月模試の目標値61.0)偏差値50未満の人数が32名であった。 ・2年進研模試(7月)の国・数・英の平均点偏差値は54.9であった。(目標値60.0/1年1月56.3) 	<ul style="list-style-type: none"> ・分析会議で共有した課題の改善策について、指導を行う。 ・模擬試験やスタディーサポートの結果分析を行い各成績層に応じた対策や個人面談による指導を行う。 ・模擬試験やスタディーサポートの結果分析を行い各成績層に応じた対策や個人面談による指導を行う。 	進路指導部
		B	別紙	別紙	各教科
2-2 英語の4技能重視も含む新しい大学入試への対応ができている。	○英語の外部試験GTEC等外受験に向けて、日常的に4技能育成の指導を計画的に行う。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・新入試(共通テスト)の試行調査、平成31年センター試験の結果、難関大学二次試験、新しいタイプの入試問題について、全員が分析し、入試問題研究を行い、授業改善に資するよう進めている。 ・入試問題研究をもとに、基礎力の充実を図るために文系は地歴・公民(日本史、世界史、現社、倫理)、理系は理科(物理、化学、生物)の時間数を増やして夏季補習を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・入試問題研究によって得た情報を、全員で共有するため、教科内での研修を行う。 ・センター試験分析や入試問題研究と、模擬試験分析からの課題解決に向けて授業や補習、朝学習、総合演習などの内容を改善していく。 	進路指導部 各教科 進路指導部 3学年
		B	<ul style="list-style-type: none"> ・1年生では、GTECの過去問題を研究し、英語を話す・活用する場面を意識して増やしている。 ・2年生では、オンライン英会話、会話教材を取り入れ、継続して英語を話す、活用する場面を増やしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・授業を始め、外部検定試験、留学生との交流、修学旅行等、さまざまな機会をとらえて、活用の場面を増やす。 	外国語科

【評価結果の分析】

・教務部

考查問題における思考力問題は、すべての科目で定着したので、質の向上を目指す。

・教育研究部

「めざす尾道北高の学び」を教員及び生徒全員がめざす姿として共通認識をもつことと、生徒の評価につなげることが今後の課題である。

・進路指導部

○模擬試験やステイサポートの結果の分析からの各教科の課題を明らかにし、改善を行う。

○1学年

進研模試1月の国語、数学、英語の平均点偏差値61.0を目標値として設定している。7月時点で56.5という状況であった。家庭学習時間の確保はできているが、成績下位層の生徒に対しての具体的な学習方法を面談で指導していく。上位層については学年主任、進路指導部などで面談を実施し、高い目標を持たせる指導を行う。

○2学年

前回1年進研模試(7月)と比較して、国語が+0.8、数学が-1.8、英語が+1.9であった。偏差値50未満の生徒の数は47人から51人に増えており、特に数学の下位層の指導に問題がある。家庭学習時間は理系が文系より少なく、学習習慣の確立ができていない生徒が多い。学習時間の多い生徒の中にも成績が振るわず、学習の方法に問題があると思われる生徒もおり、担任・教科面談などでの指導が必要である。さらに学年集会や難関大集会などを通じて、集団で学習に向かう雰囲気を醸成する。

○3学年

文化祭の影響で、放課後補習の時間が十分確保できておらず、センター試験への対応が遅れている生徒に対する指導が課題である。そこで、基礎力の充実を図るために文系は地歴・公民(日本史、世界史、現社、倫理)、理系は理科(物理、化学、生物)の時間数を増やして夏季補習を実施した。今後、模試分析から明らかになった課題を解決するために、授業や補習、朝学習、総合演習などの内容を充実させることが必要となる。

3 高い志や夢を持たせ、進路希望を実現させる。					
3-1 生徒が高い目標を持ち、その目標を維持できている。	<p>○探究活動、キャリア学習を充実させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「産業社会と人間」(1年次)「エクスプローラーセミナー」では、地域やグローバルに関する課題を発見する。 ・「産業社会と人間」(2年次)では、生徒の進路目標に応じて探究活動に即した訪問先を選定する。 ・「課題研究セミナー」(2年次)では、オープンセミナーや探究的・体験的な活動を実施し、具体的な研究テーマを設定させ、知の総合化を図る。3年次には探究活動をまとめた成果発表会を実施する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次は、広大出張講座や卒業生講演会を受講し、学問への探究心を高めた。現在、地域の課題発見に取り組んでいる。 ・2年次は、SDGsを基にテーマを設定し、レポートを作成した。 ・3年次はグループで探究活動を行い、課題探究発表会で成果を公開する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・1年次は、後期の前半にフィールドワークを実施し、発見した地域課題をポスターセッションで発表する。 ・修学旅行では、現地の大学生とSDGsを基にディスカッションを実施し、今後の課題研究につなげる。 ・課題探究活動の成果を自己課題の解決と進路選択に生かす。 	教育研究部
3-2 新しい大学入試において主体性の評価も含めた多面的・総合的な評価への対応ができています。	<p>○外部団体が実施するセミナーやコンテストを集約し、各学年、分掌と協力して生徒に提示していく。</p> <p>○各個人の活動を振り返り、ポートフォリオ化を進める。</p>	B	<ul style="list-style-type: none"> ・総務部(国際交流)、教育研究部、進路指導部が連携を図り、大学への公開講座参加(71名)、短期留学(16名)と昨年度同様多くの生徒の参加があった。 ・行事ごとにアクトグラフという形式で、生徒の活動をまとめており、ポートフォリオ化を進めている。 	<p>今後も引き続き、生徒の校外での学習活動に関する内容提示をしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・Classi等を利用して、アクトグラフから、E-portfolioへの接続を進めていく。 	各部 各学年

【評価結果の分析】

・教育研究部

2年次の海外修学旅行につなげるカリキュラム開発を行い、実施している。このことの評価と分析を行い、PDCAサイクルを回すことが今後の課題である。

4 リーダーに求められる道徳性や社会性を身に付けた豊かな心を育成する。

4-1 自律的で社会に貢献する態度(リーダーシップ・ボランティア精神など)を身に付けている。	<p>○マナー指導を充実させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・交通マナー、相手を思う気持ち、尊重する態度を身に付ける。 ・生徒会(交通委員会)が中心となり、前・後期各2回以上登校指導を行う。 ・生徒主体の活動を増やす。 ・PTA(健全育成委員会)と協力し、交通マナー向上を目的とした下校指導を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・交通マナーについては、日ごろからの声掛けにより大きなトラブルもなく過ごしている。 ・前期遅刻者数は、0.11人/日(10/92日)。昨年度0.38人/日(32人/83日)と比べ減少した。 ・前期生徒会執行部の発案で、体育祭のスローガンを募集したり、入場行進を採点したり、変化があった。 ・PTA 健全育成委員会とのあいさつ、下校指導を行った。 	<ul style="list-style-type: none"> ・薄暮時の交通安全について、注意を促す。 ・後期生徒会執行部でも生徒主体の活動に取り組む。 	生徒指導部
	○全校生徒に対して、個人、団体に年に1回以上のボランティア参加を促す。	A	<ul style="list-style-type: none"> ・前期中に、校内ボランティア清掃351名、校外への参加103名、計454名が参加。(昨年同時期286名) 	<ul style="list-style-type: none"> ・後期からもボランティアへの参加の周知を行う。 	生徒指導部
4-2 生徒一人ひとりの学校生活が大切にされ、相談しやすい体制が構築されている。	<p>○教育相談体制を充実させる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・定期または随時の特別支援教育会議・プロジェクト会議を開き、情報の共有や対応の協議をする。 ・スクールカウンセラー(SC)を効果的に活用(面談・研修会)し、生徒・保護者への支援を行う。 <p>○不登校予防を行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・心理検査活用、面談実施から要支援生徒の早期発見・対応につなげる。 ・構成的グループエンカウンター(SGE)によるクラスづくりワークを設定し、新入生が早く高校生活やクラスに慣れるようにする。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援教育会議を定期的に、プロジェクト会議を随時実施し、情報共有や対応協議をした。 ・スクールカウンセラーの積極的活用を行うため、生徒・保護者の面談や関係職員との連携、全学年生徒や教職員への研修会を行った。 ・ライフガイダンスルームを毎日昼休憩に開放した。少数の利用ではあるが、毎月の「ライフガイダンスルームだより」と合わせ、継続していく。 ・教育相談窓口を各学年に配置し、学年主任・担任等の連携を円滑に行えるようにした。 ・要支援生徒について早期発見・対応できるよう、長期休業明けのアンケートや心理検査を活用し、面談を実施した。 ・特別支援学校のセンター的機能を活用し、研修会を実施した。 	<ul style="list-style-type: none"> ・毎月の「ライフガイダンスルームだより」の発行、「こころとからだの相談日」について、生徒や保護者に周知する。 ・引き続き、特別支援教育会議、プロジェクト会議等において気になる生徒に対して、組織的に早期に対応できるよう取り組む。 	健康教育部

【評価結果の分析】

・生徒指導部

- ・交通マナーについては、良いとは言えない部分があるが、概ねルールやマナーを守った通行ができている。休日や塾帰りの並進やスピードの出すぎがあるようだが、継続して注意を促す取組を行う。
- ・生徒会執行部は主体的に活動を増やした。(体育祭、文化祭)後期についても、様々な取組を発案できるよう計画的に集まり、意見の集約を行う。
- ・ボランティアへの参加は増加傾向にある。特に校外への参加が非常に増えた。

・健康教育部

○教育相談体制の充実については、教育相談窓口を各学年に配置し、学年主任や担任等との連携、部としての把握を円滑に行えるようにした。また、特別支援教育会議やプロジェクト会議を定期及び随時実施し、生徒の情報共有や対応協議をした。昨年度より配置されているスクールカウンセラーについては、生徒対象研修会、職員対象研修会、生徒・保護者対象面談・教育相談担当との連携を行うことで、積極的活用が出来た。

○不登校予防として支援を必要と思われる生徒について、昨年度までの心理検査に加え、長期休業明けに教育相談アンケートを実施し、部による面談を実施した。その内容を担任・学年・職員全体にフィードバックすることにより、状況把握や生徒理解をすすめた。

5 社会に信頼される学校づくりを推進する。					
5-1 中高の相互理解を深める取組がなされ、中学校や地域社会への説明責任が果たされている。	○生徒募集活動を充実させる。 〈説明会等〉 ・中学生の訪問受け入れ(5～6月、体育祭) ・文化祭の一般公開(6月) ・中学校主催の進路説明会(6～10月) ・中学校への訪問(6月～2月) ・オープンスクール(8月) ・本校主催の入試説明会(10月) 〈資料等〉 ・広報用資料(学校パンフレット等)の充実を図る。	B	・中学校訪問受け入れは、2校、中学校主催の学校説明会へ出席12校、中学校への訪問による学校説明20校、本校で開催の学校説明会中学校及び教育関係者参加45名(9月末現在)と生徒募集活動を継続して実施している。 ・オープンスクール参加者数は中学生 324(382)名、保護者等 218(230)名で、計 542(612)名の参加で昨年より 11.4%減少したが、新たに生徒による少人数での学校紹介座談会、PTA 役員と保護者対象座談会を行った。 ・広報活動の一環として文化祭取材の朝日新聞記事の配付や説明会資料(P.P)の改善を図った。 ※ ()は昨年度の数値。	・今後も本校主催の入試説明会(10月)や中学校2年生対象の出前授業などで中学生や保護者のニーズに応じた内容を提供し、募集活動の一層の充実を図る。	総務部

【評価結果の分析】

・総務部

今年度のオープンスクールは、昨年同様暑さ対策も兼ねて、体育館では開会行事のみ行い学校紹介は模擬授業教室(生徒)、多目的教室(保護者)に分けて実施した。各教室ではオープンスクール実行委員がパワーポイントや動画を活用してプレゼンテーションを行った。生徒、保護者共にほぼ 100%の肯定的評価だった。生徒による学校紹介及び座談会は生徒の主体性を評価していただいた。保護者からは「北高の生徒さんが生き生きとしてよかった」「生徒さんの説明がわかりやすかった」「先生方の学校説明がよかった」等の多くの肯定的な意見が多かった。PTA 役員による保護者目線での説明等も好評であった。昨年と比較して人数が減少したが、日程を盆前にしたことで、中学校の部活動大会等と重なったこと、尾三地区中学3年生生徒の減少等が考えられる。来年度の日程については検討していく必要がある。

6 働き方改革について					
6-1 限られた時間で成果をあげる工夫がされている。	○時間外勤務時間を縮小する。	C	・9月末までの半年間で月 100 時間以上の延べ人数は 43 名であった。	・時間外勤務の多い職員に対して、面談を実施し、業務の削減ができる部分を具体的に指示する。	管理職(教頭)

・管理職

・平成 30 年度と比較するとやや減少傾向にあるが、目標達成にはまだまだ時間外勤務の削減が必要である。定時退校日の退校については、ほぼ守られているが、それ以外の課業日の勤務時間終了後の時間外勤務と週休日及び休日の時間外勤務の実態に課題が残る。

各教科

1 課題発見・課題解決学習を推進し、主体的学びを深める。 ○生徒の主体的な学び、深い学びを育成する授業を実践する。 ○「問う力」を育成し、授業評価で検証する。			
教科	評価	理由	後期に向けての具体的な改善方策
国語	B	各学年で、思考を深める発展課題に取り組ませた。2年次では、「比べ読み」を行い、生徒が「問い」を持つことで、自らの考えを広げ、作品の内容をより深く理解できるような授業づくりに努めた。第1回授業評価アンケートの結果(肯定的評価)では、主体的な学び 72.5%、探究心の涵養 75.3%、問う力の育成 75.3%であった。主体的な学び及び探究心の涵養については、校内平均を下回っている。この結果をもとに、教科会議で原因の分析を行い、教科としての課題を共有した。	教科会議で共有した課題の解決に向けて、各学年で取り組むとともに、教科全体で探究学習の目的や評価の視点等について共通理解を図る。また、「問いを立てる力」を生徒に育成するための授業手法についても研究していく。
地歴・公民	C	担当科目間で取組がバラバラであり、教科内で成果を共有できていない。また、授業評価において主体的な学び、問う力の項目で低評価であり、授業実践において目標を達成できていない。	共通の振り返りシートを用いて授業ごとの成果を可視化し、教科内でそれぞれの取組を評価できる仕組みをつくる。教科内で課題を共有し、主体的な学び、深い学びを目指す授業改善に取り組む。
数学	A	7月授業評価アンケート(数学)の肯定的評価の割合『問う力』82.8%、『主体的な学び』85.3%、『探究心の涵養』77.0%であり、目標を大きく上回った。	今後も継続して、「問う力」の育成や主体的な学びを深めるような授業の研究を進めていく。
理科	B	各学年で、知識を活用・探究させる実験や課題に取り組ませるとともに、家庭学習計画票や自己点検票など、自主的に学習する指導の工夫を行った。第1回授業評価アンケートの結果(肯定的評価)では、学習方法 79.4%、問う力の育成 78.0%で校内平均より高いが、主体的な学び 72.6%では、校内平均を下回っている。この結果をもとに、教科会議で原因の分析を行い、教科としての課題を共有した。	引き続き自主的に学習する指導の工夫を行うとともに、自主的に学習する意欲を高める指導の工夫について研究していく。
保健体育	B	7月授業評価アンケートにおいて『協働的な学び』82.7%だが、問う力が 69.3%と低い。主体的には活動している。	どのような練習方法が実践に結びつか、考えさせる活動を増やす。
芸術	B	授業評価アンケートの教科平均が、「探究心の涵養」81.6%と学校平均を上回っているが、「問う力の育成」69.8%と学校平均を下回る結果であったため。	自己表現につなげるための基礎基本の確立とともに、単元(題材)の本質的な部分を理解させ、芸術を学ぶ意義を実感させる。
英語	B	授業評価アンケート(英語)の『問う力』は 80.3%、『主体的な学び』は 83.5%であり、学校平均を上回った。	<ul style="list-style-type: none"> ・授業の様々な場面で、「なぜ」を問うこと。その際に、きちんと根拠を含めて考え、答えることを習慣化させる。 ・教師が行う発問の研究(工夫)を継続して行う。 ・11月の公開研究授業に向けて準備を進め、教科として指導法のアイデアの共有を図る。
家庭	B	生活の主体者として、個人・ペア・グループで課題に取り組み、表現できるような授業づくりをし、主体的な学びを育成できるようにした。	アクティブ・ラーニングの手法を積極的に取り入れ、生徒が主体的に授業に参加できるよう、さらに工夫をすすめる。また、社会の事象について疑問に感じたり解決したりする力を身に付けるような授業の組み立てを行う。

2 教科指導力の向上を図り、生徒の学力を最大限に伸ばす。 ○教科指導力を向上させる。 ・進研模試(7・1月)を指標とし、習熟度に応じた指導を行い、PDCAサイクルを機能させ、目標管理によって指導の改善を図る。 ・模擬試験結果分析を行い、その分析内容を授業、定期考査問題の作成等につなげる。(年3回)			
教科	評価	理由	後期に向けての具体的な改善方策
国語	B	進研模試(7月)の平均偏差値 1年 56.3 2年 55 成績層別の結果分析を行い、教科会議で報告・共有し、授業や考査問題作成につなげているが、2年では、1年1月(55.1)とほぼ変わらなかった。	模試等の結果分析から、取組の成果と課題を教科会議で検証する。特に成績中位層の生徒の引き上げや、下位層生徒への取組を重点的に行っていく。
地歴・公民	B	進研7月記述模試(3年)平均SS 世B:57.6 日B:59.5 地B:53.9 現社:61.8 7月進研模試、平均点偏差値は日世、公民はほぼ例年通りで、地理はやや低下している。	センター試験に向けより多く演習に取り組み、解答の精度を向上させる。模試分析により弱点領域を重点的に取扱い、取りこぼしを防ぐ。 2学年は11月進研より地歴公民の受験が始まるため、基礎基本の定着をはかり苦手をつくらぬ指導を行う。
数学	C	7月進研模試偏差値(数学)1年 54.6, 2年 52.6, 3年Y54.2, Z51.6 で目標を大きく下回った。	学習した内容を活用する場面を増やすことで、生徒自身が基礎基本の大切さを認識するとともに、活用する力をつける。
理科	B	進研模試(7月)の平均偏差値 3年 物理 55.2 化学 54.5 生物 60.0 結果分析を行い、教科会議で報告・共有し、授業や考査問題作成につなげている。	模試等の結果分析から、取組の成果と課題を教科会議で検証する。特に成績中位層の生徒の引き上げや、下位層生徒への取組を重点的に行っていく。
英語	B	模擬試験結果分析を行い、その分析内容を授業、定期考査問題の作成等につなげるようにしている。7月進研模試偏差値(英語)は、1年:56.0(昨年度 1年 54.2)、2年は56.1で前回1月 54.8 から上昇した。	分析結果をうけ、今後の授業での扱い方を工夫していく(継続)

2 教科指導力の向上を図り、生徒の学力を最大限に伸ばす。

○教科指導力を向上させる。

・センター試験分析(5・2月)を行い、教科指導力の向上につなげる。

・入試問題研究を行い、その成果を授業、入試問題セミナー、定期考査問題の作成につなげる。(7月以降)

教科	評価	理由	後期に向けての具体的な改善方策
国語	B	各自で入試問題研究を行った。3学年では、授業で難関大学等の入試問題に取り組みせたり、添削指導を行ったりした。	研究内容や分析結果を教科会議で共有し、授業や定期考査問題に活かしていく。
地歴・公民	B	各自で入試問題研究を行った。	研究内容を授業改善や定期考査作問に活かす。
数学	B	入試問題研究を行い、その成果を授業・考査問題の作成に活かしている。	今後も継続して、研究内容を授業改善や定期考査作問に活かしていく。
理科	B	各自で入試問題研究を行った。特に3学年の指導計画に活用した。	入試問題を分析し、問題を解くために必要な力について明らかにする。分析結果を教科内で共有し、定期考査問題や授業に活用する。
保健体育	B	入試問題研究を行い、その成果を教科内で情報を共有し研修を深めた。	体育進学希望者の3年次生の入試に向けた小論文・実技指導に取り組んで行く。
芸術	B	音楽、美術、書道それぞれ取り組むことができた。	3年次生の入試に向けた実技指導に生かしていく。
英語	B	夏季休業中を中心に、各自で分析・研究を行い、授業や考査の作問に活かしている。	教科会や日々の授業研究等で共有する。
家庭	B	入試問題研究を行い、その成果を授業プリントの項目や定期考査に取り入れた。	他分野についても入試問題研究を行い、授業内容・定期考査に取り入れる。